
インフィニット・ストラトス ~ Cloudy Summer ~

Jastice

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜Cloudy Summer〜

【Nコード】

N3919BA

【作者名】

Justice

【あらすじ】

この短編は嘘広告に近いものです。ハーレム・鈍感じゃない一夏は一夏じゃない！！という方にはお薦めしません。そして、この話の一夏君は他人に深く取り入ろうとしない・ISが何より憎いという性質を携えております。それでも良いという方だけいらっしゃいます。

(前書き)

ちよつと書いてみました。本当に連載するかどうかは状況および、自分の都合次第です。まだISについて良く分かっていないので勉強不足ですので……

これはIFの話・・・

一人の少年から始まる人生の一欠片

例えば、後に失踪するはずの彼の両親が姉と共に幸せに暮らしていたとしたら……

そして、そんな幸せな風景に一つの悲劇が起こったことで“この話の”彼が始まったとしたら……

「一夏、ちゃんと座ってるんだぞ」

「ふふふ、初めての飛行機体験だものね。じっとしてられないわよ貴方」

「すご〜い！！ 見てみてパパ、ママ！」

この一夏という少年は当時7歳、両親の仕事の都合によりアメリカ合衆国へと共に行くことになっていた。

初めての飛行機は一夏の心を躍らせ、はしゃぐには十分な要素だった。

「しかし、千冬を留守番させたのは可哀想だったかしら？」

「しょうがないだろ。それに、あの子ももうすぐ高校受験だし、おまけに剣道の全国大会の為、篠ノ之さんの所で多く練習したいと自分で願ってたんだ」

どうやら、姉である千冬という彼らのもう一人の子供は事情により、ついていくことは断念したようだ。

「けど、あの子料理全然ダメだから・・・」
「ははは……」

織斑夫妻は自分達がない間の彼女の家での様子が何となくだが予想できた。

家事が苦手なあの子だ、きっと帰ってくる時にはゴミの散らかり放題かもしれない。

『皆様、この飛行機は間もなく離陸いたします。シートベルトをもう一度お確かめ下さい』

アナウンスが入る。離陸の準備が整ったようだ。

「一夏、始まるぞ」

「ひっこつきひっこつき」

「あらあら・・・」

本当はこのまま少年にとって初めての楽しい海外旅行の始まりであつた筈だつた。

だけど

『これは緊急連絡です！ この飛行機は緊急着陸します！ スチュワードスの指示に従い、シートベルトをしっかりして席に着席してください！』』

悪戯の神はこうまで残酷になれるのだろうか

本当に偶然の出来事であった。

右翼エンジンに飛行中の鳥が巻き込まれたらしく、それが原因で炎上を起こし、操作不能へと陥ったのだ。

その時の飛行機内の騒動は想像を絶するものだっただろう。しかも、初体験の飛行機搭乗である一夏には予想も何も出来ようがない。

一夏は左右の席に座る両親にしがみつき、その未体験の恐怖から身を守るべく、必死に耐えていた。そんな我が子を守るべく、織斑夫妻もまた、一夏を覆うように抱きしめ合っていた。

こうして、飛行機はジャングルへと不時着した

雷鳴のごとく破壊音、工事現場以上の震動……

小さな体であった一夏にそれは耐え切れる筈がない。誰もがそう

思えただろう。

しかし、捨てる神もあれば拾う神もあり。

コンマで表しても下二桁となるほどの確立をこの小さな少年は掴み取ったのだ……

たった一人の生存者という記録を残して

全身の痛みから目を覚まし、初めに見た一夏の視界はあの壮大な飛行機の慣れの果てである瓦礫の山、広がり続ける炎の跡

……そして、そんな自分に申し掛るように息絶えた“頭が潰れた”父親と“下半身の千切た”母親の姿だった。

これは夢だ。悪い夢なんだ……

少年は逃げようとした。だが、現実というものは形として視界に・嗅覚に・体感に傷跡として残るままだった。

だから、忘れない……そんな想いに引っばられるかのようにその場からフラフラと死人のような動作で離れていった。

だが、ここは自分の知る場所ではない。
生い茂る密林・見たことのない生き物……
まだ7歳になったばかりの一夏にとつてはこの現状で何をするべきかも分かることも出来ないのだ。ましてや、周りには誰もいないのだから。

その為、歩き続けた。

歩いて、歩いて、転んでも、泣きそうになっても……
痛む腕や足を我慢しながら少年は歩き続けた。

本能が「生きたい」と望むが故に……

こうして、半日はジャングルの中をさ迷い、彼は漸く一つの小さな村にたどり着く。

だが、そこには彼の求める所とは離れた場所だった。

なんと、その村は『ゲリラ部隊』の隠れ家だったのだ。

実を言うと、彼が落ちた今いる場所は『中米』でもあった。

この当時は政権が不安定な状態であり、反政府軍と政府軍との鏖迫り合いが日常茶飯事でもあった。

警戒されつつも保護された一夏だったが、その村の彼らからしたら『余計な荷物』を背負ったと思われる要素でしかない。

偶々日本語に少々詳しい隊員によって現状をなんとか理解出来た
一夏に残された選択はたった二つだ。

自分達の秘密の為死ぬか？

自分達と共に闘う為生きるか？

この村には『兵士』以外はいらないのだ。

無論、一夏は後者を選ぶことに決めた……

そこから先は想像を絶する訓練の数々だ。

武器の扱い……

格闘技……

情報工作……

e t c e t c ……と様々な技術を叩く込まれた。

その間で何度泣き喚いただろうか、何度怪我を負ったことだろう
か……

数年もする内、一夏はゲリラ部隊の一員として幼いながらも高い
成果を上げることとなった。

だが、それも数ヶ月後には気泡のごとく消え去ろうとは……

IS (インフィニット・ストラトス)

この兵器が出現するまでは……

数年前、一人の日本人の発明からそれは始まり、元は宇宙空間での活動を想定し、開発されたMSであった。マルチフォーム・スーツしかし、開発当初は全く注目されていなかったそうだが、その一ヶ月後に起きた『白騎士事件』によってその見方は一片された。

『白騎士事件』……日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射されるも、その約半数を謎のIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件の事だ。

そこから従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。

当然、その影響は一夏達の活動する中米にも及んだ。

政府軍側のIS導入という形で

従来の戦車や戦闘ヘリもISには歯が立たず、ましてや銃等の武器を持つだけの生身の人間など論外だ。

戦況は一瞬にして傾き、反乱は政府軍の勝利による結果で終わった。

話の形としてはアツサリなものだが、「彼」にしてみれば全然違う。

「ルベン！！ カルロス！！ ちくしょおおおお
！！！！」

刻みつけてしまった、命を共にし戦ってきた仲間が殺されていく姿を……

「なあ、嘘言わないでくれよ。お前が死ぬなんてそんな馬鹿なことあるかよ」

知ってしまった。自分達の戦いが無駄になったことを……

「冗談言わないでくれ隊長！！ 俺に、あいつらに背中を見せて逃

げろって言うんですか!!」

分かってしまった。自分達がどれほど無力なことを……

少年から成長し、青年へと変わった一夏は部隊の隊長の最後の願いを聞き入れ、少数の仲間と共に逃走を決意した。

そうするしかない彼の胸の奥はどれほど悔しかっただろうか……どれくらいこつした自分に怒りを感じたことだろうか。

ジャングルを抜けていく途中、一夏達は『アレ』に再び出会う。

「反乱軍の残党を発見！ これより排除にかかります」

「くそ……」

「坊主！ 此処は俺達に任せて先に行きな！」

再びISの一機と闘う事になったとき、連れていた仲間はこの中で一番年下でもある一夏だけでも逃がそうと彼の前へと出ていった。

だが、結果は見るまでもないだろう……全滅だ。

何がどう間違ってしまったのだろうか？

「後は貴方一人ね。ぼくちゃん」

ISが出てこなければ、皆が死ぬことは無かったんだ

「シールドエネルギーはギリギリだけど、貴方一人ぐらいならどうにでもなるしね」

憎い

「See you」

ISが・・・憎い!!

そこから先は……一匹の獣がISへと向かった。

予想外の動きにIS搭乗者は焦り、一瞬の一撃に獣が隠し持っていた手榴弾をISの関節：稼働区域に挟み込むように叩き込まれる。それによりシールドエネルギーは0近くへと変わり、懐に入り込んでいた獣は本能に任せるがまま拳銃を取り出して発泡する。だが、IS装甲を貫くには役不足だったらしくダメージは見当たらない。そんな獣を仕留めるべく、敵は武器切替で出したブレードで切りかかるうとするが、鋭い蹴りによってブレードを弾き飛ばされ、今度は顔が出ている場所に銃を向けられる。

「この、小賢しい!!」

とつさの判断でそのまま腕を思いつき振り振って獣を遠くへと飛ばす。その間にマシンガンを出して転がっていく獣を攻撃するが、障害物が多いあまりにそれは命中しなかった。

「駄目だ、もっと強い武器が……」

獣……いや、冷静さを取り戻しつつあった一夏は激しいマシンガンの銃撃に身を伏せつつ、あのISに勝つ策を考える。

障害物が徐々に削れるように無くなっていく中、彼の目に「それは写り込んだ。」

マシンガンの銃撃を止め、相手の位置をセンサーで探る敵は他のISから連絡を取り出す。

『現在、敵は一人……だが、卓越した戦闘力により苦戦気味。シールドエネルギーの残量も危うい』

『了解、至急本部へ帰還されたし』

『了か……ッ!』

了解という前にISのセンサーに反応が出る。

動いた!!

センサーがはっきりと敵の動きを追い、これから来る動きに合わせて弾丸をぶちまける。

それで終わり。これで全て終了だ……

だが、彼女は考えつかなかった……

『機械』と『人間』の違いというものを……

そのまま出てきた敵に素早くマシンガンを向け、弾丸を発射する。その時に走ってくる彼の行動にはこの時度肝を抜かれたかもしれない。

「う、嘘!？」

持って走っているのだ……自身のISの武器であった『ブレード』を……

それを盾にするかのように前に出しつつ、降り注ぐ弾丸の嵐をくぐり抜けていく。

IS専用のブレードは大きい……人間一人くらいはなんとか隠せるぐらいにだ。

しかし、幾らか弾丸が掠り、一夏は傷を作り鮮血を飛び散らす。

だが止まらない !!

「お、お、お、お、お、お、お、お、オオオオoooooooooooo
!!!!!!!!!!!!!!」

獣の如く咆哮を上げ、一夏は突っ込んでいく。

そのままブレードを振り上げ、マシンガンを破壊し……

一気にブレードを敵ISへと振り下ろした

人間からとは想像できない力で振り下ろしたブレードは搭乗者の体ごと袈裟から半分ほど切り裂いた。搭乗者は傷口から血を流し、口からも血を吐く。そうしていると、ISが量子へと変わり消えていく。すると、そこには血を流して死に絶えた女性の姿が存在した。

「ハア……ハア……ハア……」

終わった……勝った……勝利した……

その歓喜は一夏の崩れかけていた理性を修復するのには十分な感情であった。

その影響は一夏の髪にも……ボサボサに伸ばしていた髪の毛がほぼ白く変化するにまで至ったりもした。

「……………!!!」

ジャングルの奥地にて、一人の青年の雄叫びが響きわたった。

こうして、あの反乱から1年……一夏は政府軍の手から逃げ延び、合衆国へと渡った。

そこで様々な出会いを経験し、ゲリラとしてではない「個」を築き上げる時間を作ることになった。ちなみに、他にも何人か逃げ延びれた仲間にも数度出会うこともあった。

時折、偽造パスポート等を駆使し、何度か日本に行ったりもした。自分の生まれた土地だということだけは覚えていた為か、一度見てみたかったのかもしれない。

そして……時は過ぎ、始まりがやってくる……

IS学園

「グレイ・マルティネスだ。宜しく……」

何の因果か、一夏はIS学園へと入学することとなる。

嘗ての自分の通称と、今は無き戦友の一人の苗字を己の名前にし

……

「織斑 一夏という人間を知ってないだろうか？」

「織斑教諭の関係者か？ 知らないな？」

「そ、そうか……」

彼は嘗ての幼馴染に出会い、偽の仮面を被って接することを決める。

「貴方には、誇りというものがありませんか!？」

「悪いが、俺には言葉で言い表せる程までに簡単な『誇り』という存在など興味はないんでな」

「なんですって!?!」

守るものの為に無くしてしまった貴族の少女とぶつかり……

「相変わらず物騒な雰囲気垂れ流してるわねアンタは」

「これが俺の普通だ。むしろお前が慣れる、鈴」

「意味がわからないわよ!?!」

一時の安らぎの場で嘗て出会った知り合いの少女と可笑しく過ぎし……

「だったら、僕はどうしたらいいの!？ 何も知らないくせに!?!」

「当たり前だ。元から赤の他人であるお前のことなど俺が知るか馬鹿」

「……………ッ!?!」

駒として生きること強要されたルームメイトの少女にはどこか呆れを感じ……

「貴様が！！ 貴様の存在こそが教官を苦しめるんだ！！」

「ふざけるな！！ 俺はお前にとつての怒りの吐き捨て場ではない」「認める………ものか………」

憧れから崇拜へと恩人への意識を変えてしまった元落ちこぼれの軍人である少女には怒り……

「正直に言ってくれ……お前は、一夏なんだろ！！ 私のたった一人の弟である織斑一夏なんだろ！！」

「……残念ですが織斑教諭。俺はその名前に当てはまる人間ではありません」

「違う！！ 嘘をつかないでくれ！！ どうして拒絶するんだ！！」

空っぽの世界から希望を求め始めた世界最強 ブリュンヒルデからは逃げる事を決め……

「ハロハロこんにちわ〜！！ 十年ぶりかな『いっくん』」

「貴様がその名を口走るなこのB.I.O.C.H野郎が！！」

「が〜ん！！ 束さんの知るいっくんが不良になっちゃったよ〜！！！！」

自分の世界を壊す原因となった国際テロリストには唾を吐く。

？

彼女達の出会いは『濁った夏』をどう変えていくのだろうか

）

インフィニット・ストラトス〜Cloudy Summer

後日連載開始……かな？

(後書き)

とりあえずこんなものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3919ba/>

インフィニット・ストラトス ~ Cloudy Summer ~

2012年1月10日04時45分発行